皇學館論叢　第三十一巻第二号
平成十年四月十日

資料

馬瀬狂言の研究（資料）

山中　華

はじめに

これは、『皇學館論叢』三〇―六（平成九・一二）掲載の「馬瀬狂言の研究」の資料である。三重県伊勢市馬瀬町に古くから伝わる馬瀬狂言は、昭和三八年に県指定の無形文化財となっており、現在も馬瀬狂言保存会によって定期的に上演されている。その芸は、現在も江戸時代に和泉流の芸を伝えてくれた師（玉泉）の教えのままである。馬瀬町には馬瀬狂言に関する文献資料が数多く存在しており、馬瀬狂言の芸はもちろんのこと、近世伊勢地方の芸能を知る手がかりにもなると思われる。今回は、「馬瀬狂言の研究」に直接関係する資料のうち五つを資料としてまとめた。「花盗人」「三十日囃子」の二台本については、一子相伝の教えにもかかわらず、「馬瀬狂言発展のために」という馬瀬狂言保存会の御好意で翻刻させていただくことができた。改めて馬瀬狂言保存会の皆様に心から御礼を申し上げます。また、平成八年には、馬瀬狂言保存会のほうから『馬瀬狂言集』が刊行されている。馬瀬の現行曲のうち狂言三六番と謡（馬瀬独自の「豊年の貢」「長久楽」を含む）、笛や太鼓の譜が載せてあり、現在の馬瀬狂言の姿を知ることができる。

馬瀬の文献資料一覧

馬瀬狂言保存会の会長・中林さんのもとで存在を確認した資料四五点について、表紙とその内容を簡単に記した。なお、これらの資料は馬瀬狂言を受け継ぐ各家によって管理保存されているものであって、これ以外にも多くの資料の存在が予測されるが、平成八年十月の調査では確認できなかった。資料には辻能の仙助座の番組も含んでいる。なお、この一覧以外の馬瀬狂言に関する資料については現在整理・調査中である。表記は原文のままとし、不読の文字には□をあてた。

なお、この一覧の資料名は冊子の表書きであり、（　）は山中の調査時の覚書である。

1、一巻　四季の謡（内表紙「本主　粂治良　文政十一年　子のとし　吉日」謡の台本）
2、其の四　小鼓手附秘事（裏表紙「文政十四年　前川粂治郎」天保二年の追善の記録あり）
3、太鼓頭附書（内表紙「上掛り　太鼓・頭附」他の曲名あり）
4、其の二　小鼓手附秘書　加茂　羽衣　疾笛　子のとし冬日　本主　粂治郎（大浦ほか。）
5、謡目録　慶應四年戊辰年二月（笠之段・橋弁慶・猩々・ざんざ・七ツ子・十七八　他）
6、瓜盗人（台本）
7、歌仙　六儀（台本）
8、流儀狂言（内表紙「他見不祥　流儀狂言秘書　玉泉翁直伝　冬吉日　□□七五朗」文政十三年）
9、野村流儀　狂言（内表紙「丁酉正月吉日　當流六儀　他見不祥」台本）
10、狂言（謡等の記録）
11、狂言（三十日囃子・びわ聟　赤木粂三郎の名前あり）
12、狂言（台本）
13、狂言謡　全（謡の目録・覚書　明治初期のもの）
14、狂言集　□（内表紙「馬瀬中林七三朗　著　狂言集　全」栗焼・能の始ノ事　他）
15、狂言本　一巻　泉玉三郎　著（大正時代に書かれたもの）
16、狂言六儀　三□小傘　他見不祥（台本　後部は欠落）
17、狂言六儀　文政十一年　狂言六儀　正月吉日（内表紙「傳受者也　他見不祥　玉泉翁　信定（花押）直　傳　酉のとし冬吉日」　謡中心の台本）
18、狂言六儀　他見不祥　寅□とし（富士松　謡の台本）
19、熊坂　太鼓手附　七三朗（台本）
20、こんくわい　文久三癸亥年五月御木曳二出ス（台本）
21、太鼓頭附　玉泉流　大正拾年二月　中村定之助（仕舞狂言の台本）
22、鬼瓦　太子手鉾　清水　狐塚　ひくず　文荷
23、狂言番組第二巻（二千石　悪坊　他が上演されている。昭和のもの。）
24、能番組　天保二　八月吉日（仙助一座番組帳）
25、狂言六儀　鈍太郎　佛師（台本）
26、膏薬練　御冷　船ふな　雁礫　長刀応答（台本）
27、不明（こんかいの台本　学習用ノート）
28、狸腹鼓　一子相傳の事（台本）
29、釣狐　野村小三郎直傳（船橋）

馬瀬狂言の研究（資料）（山中）

30、野老一番（仕舞ハ番之内習之　嘉永三）
31、鈍太郎　嘉永庚　戌　年三月吉日（台本）
32、能狂言番組　嘉永四辛　亥　（仙助一座番組帳）
33、花折　流儀　他見不免（謡台本）
34、花折　玉泉会（台本　演出の記入あり）
35、花盗人　天保七丙　申　正月吉日写（台本）
36、萬寶小謡集　嘉永四辛　亥　霜月吉日（ただし、曲名の記入はなく、謡の文句だけが、記載されている。）
37、水掛聟　安政五戊　午　正月廿日相勤（台本）
38、八尾（台本　天保□□□正月）
39、弓矢太郎（内表紙　一・弓矢太郎　二・茸　三・子盗人　四・不阿久（武悪）
40、謡曲　手引き　傳書（謡目録　一・嵐山　二・小塩　三・加茂　四・瓢ノ神　他）
41、謡曲花傳書（謡目録　一・紅葉狩　二・大社　三・唐船　四・海士　他）
42、六儀　他見不祥　尾州　玉泉翁信定傳　天保八丁　酉　年冬吉日（目録　一・哥仙　二・若菜　三・金岡　四・太鼓負他）
43、流義　六儀　他見不祥　其師直傳之（謡の台本　船ふな）
44、狂言番組扣（嘉永三年～大正四年までの計四〇回程の上演記録）
45、不明（狂言台本　三一－二八・中林武一　国語ノートに記されている）

馬瀬狂言所有曲目一覧

曲目は馬瀬の台本・番組・名寄から収録したものである。表記については原則として馬瀬のものを用いたが、馬瀬において読みや漢字表記がわからないものは、『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（池田廣司）に従った。なお、本論で問題とした大蔵流の固有曲には●を、和泉流の固有曲には○を、鷺流の固有曲には☆をつけておいた。また、未確認ではあるが、一覧に記した一九三番以外にも馬瀬には狂言十数番が存在するようである。なお、半能（狂言と能がまざったもの）は取り上げず、狂言として扱っているもののみを扱った。「竹生島」に関する曲はこのほか「竹生島詣」があるようだが、相違の確認ができなかったので、ここでは「竹生島参」のみをあげた。また、「馬瀬狂言の研究」でも述べたように馬瀬では《釣狐》と《こんかい》を別曲として扱っているため、ここでは同曲異名のものを別の曲として数えた。

あ　あかがり（皸）
　あくたがわ（芥川）
　あくたろう（悪太郎）
　あくぼう（悪坊）
　あさひな（朝比奈）
　あそう（麻生）
　あわたぐち（粟田口）
い　いおりのうめ（庵の梅）
　いぐい（居杭・井杭）
　いしがみ（石神）
　いなばどう（因幡堂）
　いぬやまぶし（犬山伏）
　いままいり（今参）
　いもじ（伊文字）
　いるまがわ（入間川）
　いろは（伊呂波・以呂波）
う○うおぜっぽう（魚説法）
　うぐいす（鶯）
　うしうま（牛馬）
　○うしぬすびと（牛盗人）
　○うたあらそい（歌論）
　うちざた（内沙汰）
　うつぼざる（靫猿）
　うりぬすびと（瓜盗人）
え○えちごむこ（越後聟）
お　おにがわら（鬼瓦）
　おにしみず（鬼清水）
　おばがさけ（伯母が酒）
　おひやし（御冷）
　おんぎょくむこ（音曲聟）
　○おんだ（御田）
か　かきうり（柿売）
　かきやまぶし（柿山伏）
　かぎゅう（蝸牛）
　かくしだぬき（隠狸）
　かずもう（蚊相撲）
　かせん（歌仙）
　かなおか（金岡）
　かなずじぞう（金津地蔵）
　かにやまぶし（蟹山伏）
　かねのね（鐘の音）
　かまばら（鎌腹）

かみなり（神鳴・雷）
○かんじんひじり（勤進聖）
がんつぶて（雁礫）
き きつねずか（狐塚）
きろくだ（木六駄）
きんや（禁野）
く くいかひとか（杭か人か）
くさびら（茸）
くさびらやまぶし（茸山伏）
くじざいにん（闔罪人）
くちまね（口真似）
くびひき（首引き）
くもぬすびと（蜘蛛盗人）
くらままいり（鞍馬参）
くらまむこ（鞍馬聟）
くりやき（栗焼）
け けいみょう（鶏猫）
こ こうじ（柑子）
こうじだわら（柑子俵）
こうやくねり（膏薬煉）
こしいのり（腰祈）
こぬすびと（子盗人）
このみあらそい（木実争・木實争）
こぶうり（昆布売）
こぶがき（昆布柿）
☆こんかい（今悔・狐獪）
さ さつまのかみ（薩摩守）
さどぎつね（佐渡狐）
さんにんがたわ（三人片輪）
さんにんのちょうじゃ（三人長者）
さんぼんのはしら（三本柱）
し ●ししむこ（師子聟）
じしゃく（磁石）
じせんせき（二千石）
じぞうまい（地蔵舞）
しどうほうがく（止動方角）
しびり（痺）
しみず（清水）
しゃてい（舎弟）
じゅうき（重喜）
しゅうくがらかさ（秀句傘）
しゅうろん（宗論）

す　すえひろがり（末広がり）
すおうおとし（素袍落）
すはじかみ（酢薑）
すみぬり（墨塗）
せ　せつぶん（節分）
せみ（蝉）
そ　そうはち（宋八・惣八）
そらうで（空腕）
た○たいこおい（太鼓負）
だいこくれんが（大黒連歌）
○たいしのてぼこ（太子の手鉾）
○たうえ（田植）
たからのつち（宝の槌）
たけのこ（竹の子）
たこ（章魚）
たちばい（太刀負）
たぬきのはらつづみ（狸腹鼓）
ち　ちぎりき（千切木）
ちくぶしままいり（竹生島参）
ちどり（千鳥）
ちゃつぼ（茶壷）

つ　つうえん（通円）
つくずくし（土筆）
つりおんな（釣女）
つりぎつね（釣狐）
つりばり（釣針）
と　どぶかっちり（丼磕）
どもり（吃り）
どんごんそう（鈍根草）
どんだろう（鈍太郎）
な　ながみつ（長光）
なきあま（泣尼）
○なぎなたあしらい（太刀応答）
なとりがわ（名取川）
なべやつばち（鍋八撥）
なりひらもち（業平餅）
なるこ（鳴子）
なわない（縄綯）
に　におう（仁王）
にくじゅうはち（二九十八）
にわとりむこ（鶏聟）
ぬ　ぬけがら（抜殻）

○ぬし（塗師）
ぬりつけ（塗附）

ね
ねおんぎょく（寝音曲）
ねぎやまぶし（襴宜山伏）

は
はぎだいみょう（萩大名）
はくよう（伯陽）
はなあらそい（花争）
はなおり（花折）
はなご（花子）
はなぬすびと（花盗人）
はらたてず（腹不立）
はりだこ（張蛸）

ひ
びくさだ（比丘貞）
○ひくず（簸屑）
ひのさけ（樋の酒）
ひめのり（絹粥）

ふ
ぶあく（武悪）
ふくのかみ（福の神）
ふくべのしん（瓢の神）
ふくろやまぶし（梟山伏）
ふじまつ（富士松）
ぶす（附子）
ふせないきょう（布施無経）
ふたりだいみょう（二人大名）
ふたりばかま（二人袴）
ぶっし（仏師）
ふなわたしむこ（船渡聟）
ふねふな（舟ふな）
ふみずもう（文相撲）
ふみにない（文荷）
ふみやまだち（文山立・文山賊）
ぶんぞう（文蔵・文三）

ほ
ほうしがはは（法師が母）
ぼうしばり（棒縛）
○ほうじょうのたね（北条の種）
ほねかわ（骨皮）
ぼんさん（盆山）

ま
まくらものぐるい（枕物狂）
○まつばやし（松囃子）
まつやに（松脂）

み
みずかけむこ（水掛聟）
○みずきかず（不見不聞）

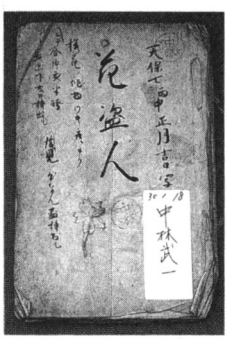
む　むねつき（胸突）
も　もちさけ（餅酒）
や　やお（八尾）
　やせまつ（痩松）
　やわたのまえ（八幡の前）
　やわたむこ（八幡聟）
ゆ　ゆうぜん（祐善）
　○ゆみやたろう（弓矢太郎）
よ　よこざ（横座）
　よびごえ（呼声）
　よねいち（米市）
ら　らくあみ（楽阿弥）
れ　れんがぬすびと（連歌盗人）
ろ○ろくにんそう（六人僧）
　ろれん（呂蓮）
わ　わかな（若菜）

番外曲

あかぎまつり（赤木祭）
うつぼむこ（靱聟）
ころうやまぶし（古老山伏）
馬瀬狂言の研究（資料）（山中）
ちょうきゅうらく（長久楽）
はち（蜂）
びわむこ（琵琶聟）
ほうねんのみつぎ（豊年貢）
みそかばやし（三十日囃子）
みとりずもう（見取角力）

花盗人（馬瀬本）

天保七年写の馬瀬に残る狂言台本。台本の表紙部分に桜の花の飾りがついている。中林武一氏蔵。これは、本論の「二　馬瀬狂言の台本系統」の中で波形本・古典文庫本とともに比較に用いた台本の翻刻である。本論ではこの馬瀬台本・波形本・古典文庫本の対照表を作成し、三台本の異同を確認した。なお、



「馬瀬狂言の研究」で花盗人の対照表を用い、馬瀬狂言の台本は「口伝の芸を書き留めたもの」と記したが、表紙に「写」という文字があり、馬瀬に残る他の花盗人の台本と比較を要するのでこの台本だけでは断言できない。

天保七丙申正月　吉日　写

花　盗　人

桜花ノ作物　ワキ　□□□

シテ　合片衣半袴

後見　□なん盃持出ル

アト　長上下太刀持出ル

」表紙　オモテ

〻是ハ此邊リノ者テ御座ルいつもとハ申なから庭前ノ花が見事に咲テ御座ル夜前何者しれずさん〻にあらして御座ル今宵は自身番をして花盗人をとらようト存ル　〻是ハ此邊リの者デ御座ル夜前去ル方へ参リ　返ルさにある御路路を見て御座ハ余リ花か心よう咲て御座つたに仍而一枝手折　とある聖人に参らせて御座れハ扨々」1オ

見事な花じや今一枝ト御所望被成た夫故今宵も夜前の所へ参りかの花を折取て参うト存ル　寔の人のこゝろ面白う楽花を無得心に折取と云ウハ心なゐ事でハ御座れ共聖人の仰がもだしがたなゐに仍而是非無ウ参ル事じゃイヤ何かと云間に是じゃハゝア夜前の事をまだ亭主がしらぬとみ」1ウ

ゐて路次は其侭あゐて有先入ウハゝア咲たり〻こりや夜前ゑハ咲増た誠に咲も残らずちりも始ず ト云うハ此事じゃ扨折取らずハなるまゐ此枝に致ふかイヤ是ハ見事て折れまゐ思ひ切て是に致う　アト〻カツキ　〻こりや何と召ル　〻なんとゝハ己夜前ト云イ今宵ト云イよう花を折取りに参ったな　シ〻ハア」2オ

今宵ハ此花の本にさらし置夜が明次第成敗致スそう心得　シ〻是ハ迷迫デ御座ル　ア　〻何の迷迫まんまと花盗人をとらへて御座ル夜か明次第成敗致し存ル　シ　〻連歌跡ヲ埋テ花ノ暮をおしむさこくまさに空して後チノ春をまたずト云ウ事か有ル古のさこくト云者ハ花故心をそらにしてがゞたる谷に落て」2ウ

つゐに空うなる又今某花ゆへにきられん事そつともいとわずあら詫まじ　詫候まじ　ア〻花盗人が何事やら申スヤイ〻汝ハ何事を申　シ〻私ハ何事も申ハ致しませぬ　〻そちもよう思てもみよ　人の心面白う果ハ花を無得心に折取ト云ウ事があるものか昔から歌にも　〻春風ハ花のあたりをよきて吹ケ心すがらやうつらふてみん」3オ

「など、有物を無得心に折取ト云事か有ものが　へさりながら夫レ花は春ニだに有レば又咲花に名残がおしくば折取ト申哥も有かト存まする　へ何ト云哥が有　哥　へみてのみや人にかたらん桜花手毎に折て家土産にせんなと、御座ル時は一枝など手折とてさのみ科にハ成ますまいかト存まする　へ扨、そなたは心のやさしゐ人じゃ此」3ウ

上ハ歌を一首よましませ命を助ケておませうぞ　へ先以テ忝存まするさりながら命が助りたさに哥をよふだなど、御座つては人口もいかゞて御座ル只此侭に御成敗も成ませ　アトへイヤ夫ハそなたの聞ようかわるゐそなたのよふな心のやさしい人をりやうじにいましめたとがをそなたの哥でゆるされたいと」4オ

云事ておりやるひらに一首よましませ　へそふあらはようてもみませうが　へ一段トよかろう　シ　へこうも御座りませうか

へ早出たか　哥　へ此春は花の本にて縄つきぬ　へ此春ハ　へ縄つきぬ　へしたり〳〵とれ〳〵いましめをとゐておませう　へ是ハ忝存まする　ア　へサアとゐた

へ扨私わもうこう参じませう　ア　へヤア是々酒を一つのましませ　へ先以忝存まする去りながら」4ウ

命を助ルさへ御座ルに只此侭に御暇申ませう　へひらに一つのましませ　へ左様ならは頂て返りませうか　へ先夫に御まちやれ　へ心得ました　へサア〳〵先下ニ御座れ　へ畏テ御座ル

へ身共が酌をせう　へ是ハ御慮外て御座ります　へ丁と参れ〳〵御座り升〳〵扨是ハ何ト致ませう　へ身共か一つ呑ウ是ハ慮外て御座ル私が酌を致ませう丁とあがりませ　へ御座ル〳〵」5オ

扨こなたのような心のやさしゐ人が夜前ト云イ今宵ト云イなぜに花を折取に参ったぞ　へさればの事で御座ル夜前去ル方へ参り返ルさに御路次をみまして御座れハ余り花か心よう咲て御座つたに仍而一枝手折とある聖人に参もて御座れは扨、見事な花じゃ今一枝と御所望被成たに仍而夜前ト云イ今夜ト云イ」5ウ

此ような面目ない事は御座らぬ　へ扨はその様ナ事か扨是ヲこなたへさそう　へ又頂ませう　へちようとあかりませ　へ御座りの〳〵扨又是を　慮外ながらこなたへ進せませう　へ又身共が呑う　へ慮外テ御座ル丁とあかりませ　へ有ぞく扨かう請持った所て一さしまわせられゐそうあらハ小哥を謡ませうよう御座候う」6オ

（小哥）うへの山から鳥がくるやろ花かちり候いささらば鳴子をかけて花の鳥をおほふ　ア　へよいや〳〵　シ　へ不調法致しました　へ扨是をこなたへさそう頂ませう　又花の春は清水のたゝたのめたのもしき春も千、の花盛り　へ是ハ御宥て御座り升扨又是を慮外ながらこなたへ進ンぜませう　へ又身共が」6ウ

頂こうか　へ丁とあかりませ　へ御座ル〳〵扨こう請持つた所

て何成共を一さしまわせられぬ　へ舞てもみませうか　へ一段とよう御座ろふ　（舞）キこうし〳〵小原木めされ候へ　おはらしつはらせりやうの里　おぼろのしみづにかげは八瀬の」7オ
里人しられぬ梅のにほふやしられぬ梅のにほふや此やぶ里の春風に私がさきちる花迄も雪はこぼれて春さむし　小原木めされよおはら木めされ候へ（右は舞）　へよいや〳〵無調法致しました中々面白イ」7ウ
事て御座った扨も一つ参らぬかもふ御取被成て被下左をあらば取ふ扨私ハもふこふさんしませう　へヤア是々土産をうませう
　へ是ハ忝のふ御座る（桜の枝を折）是ハ忝のふ存まする　此御礼には聖人同道して参り急度御礼申ませう聖人同道して重て出さしませ　月の光花のかけいつれか今宵の思ひてならんあはれ一枝を花の袖に手折て」8オ
月をもともになかめはやの望はのこれり　此春の望のこれりハ、ア忝のふ存まする　へよふおりやつた　へハア」8ウ

三十日囃子（馬瀬本）

この狂言は、台本【狂言】の中に《琵琶聟》とともに収められている。この台本は辻能の一座・仙助座の赤木粂三郎に伝授されたということが記してあり、資料「能狂言番組」の番組で確認することができる。馬瀬狂言保存会の会長中林さんの記憶によると、「三十日囃子」は昭和十一年まで上演されていたということである。お師匠さんは当時青年団の中林さんに上演を勧めていたそうだが、戦争による中断も影響してか受け継ぐ機会を得られなかったということである。なお、「みそかばやし」は『祖家秘書狂言大全集』（国会図書館蔵）にも収められており《卅日はやし》と表記されている。黒川にも「三十日囃」が存在するという。馬瀬の「三十日囃子」は『祖家秘書狂言大全集』のものよりも短く、簡略化されているようである。黒川の「三十日囃」については橋本朝生氏が「能楽タイムズ」（昭和五五年四月五日・昭和五七年二月一日）で詳しく述べている。

この馬瀬の「三十日囃子」は、馬瀬狂言の芸を知る事ができるだけでなく、『祖家秘書狂言大全集』・黒川・馬瀬・仙助座の関係と芸の伝承経路を探るのに役立つのではないかと思う。

狂言　　」表紙

シテ　へ一日くとおくるほどに今日は早とつと大晦日で御座る
　邊には歳暮の御祝義の正月の御調のとことのほか賑やかなれ

とも某は来る年もく不仕合せで当年などハ年の取様もない仕合せで御座る　爰に何かし殿と申方に銀子お借用致して御座る久みしに成とも返弁の致さぬ余り気の毒に存に依テ又爰に何某殿と申て有徳人が御座る是へ参り銀子お借用致し直に返弁の致おと存る誠に来る年もく不仕合せて当年なとハ年の取様もない仕合しや　アトヘ是ハ此邊の者で御座る爰に何某と申人に銀子お」7オ

用達て御座れハ久々になれとも返弁の致さぬ今日大三十日なれはさいそくに参と存ル　シテヘエイ何かし殿　ア　ヘエイ何某お主はとれいゆく　シ　ヘサレハの事で御座るこなたの銀子も久々になれとも返弁の致しませぬ又爰に何某殿のと申て有徳人か御座る是へ参り借用仕り直に返弁の致おと存シて今参る所で御座りまする　ア　ヘ夫は幸じゃ某も其何某方へ行お　シ　ヘあの御出被下まするか　ヘ中々是は御苦労で御座りまする　さおあらはサアく御出被成て被下れい　ヘ心得タ　シ　ヘイヤ何かと言内是で御座る　ア　ヘまことに是じや」7ウ

シ　ヘ某か参り借用仕り直に返弁の致しませう　ア　ヘヲゝその返弁の待でおりやろう　シ　ヘものも案内も　借　ヘイヤ表に案内かある案内ハたそ　シ　ヘ私で御座りまする　借シヘエイ何かし当年ハ仕まいか早かつたの　シ　ヘイヤモ仕まいまする段で御座ろうか来る年もく不仕合せて当年抔ハ年のとりようもない仕合せで御座る　金　ヘ是ハしたり某は又早お仕舞て歳暮の礼に御出やつたかと思た　シ　ヘ早足御無心に参りました何とぞ銀子お御借被成被下ならは有難お存シまする　金　ヘ夫ハ心安イ事じゃ借シておませう　ヘ是ハ忝のう御座りまする」8オ

借シヘ扨そなたにちと見する物があるこう通らしませ　シ　ヘ畏テ御座る　カシヘ是お此比求た見ておくりやれ　シ　ヘハハア笛で御座りまするか　カシヘちと此比稽古する吹て見様聞ておくりやれ　シ　ヘ心得また［此所笛の調べ］　シ　ヘハハア是はけつっこうで御座りまする　カ　ヘ是は如何な事笛お吹ク是何かし　シ　ヘハア　ア　ヘ今の物は　シ　ヘイヤおつけ借まするしばらくお待被成　ア　ヘ心得タ　カシヘ是々何かし某ハいつも三十日に囃子おするそなたわ鼓お打ておくりやれ　シ　ヘ畏テハ御座れとも今日は大三日て御座りまする吟今の物お　カシヘ夫はきつかいおしやるな借ておませうサアく鼓お打ておくりやれ」8ウ

某が謡おう［玉かつら小鼓一調傳あり］　是は面白おおりゃる此上は大鼓にせう　シ　ヘ是は迷惑で御座る　アトヘなんじや大鼓お打う　アトヘ是々何かし返弁のおしやらるか　シ　ヘたゝ今返弁の致しまするしハらく御待被成被下れ　カシヘサアく大鼓お打ておくりやれ又某が謡おう　［道明寺太鼓一調傳あり］　ア　ヘ是何某何事おしておひやる　シ　ヘたゝ今返弁致しまする

しはらくお待被成被下　ア　へ今日おいつそと思ておひやる
カシへ此上は太鼓お打ておくりやれ　シ　へ是は迷惑で御座りまする　私はたゝ今の物お借り申あなたこなたへこう物と仕られねはなりませぬ　カシへ扨ゝせわしうおしやる」9オ
此上は銀子お是へ出シておこうに依テ夫お見て楽て囃子ておくりやれ　シ　へ畏テ御座る　カシへ某か舞おそう　へサア〳〵舞せられい　ア　へ何んじゃ舞おまうかちと見たい物じやか
［春日龍神太鼓壱調の習あり中同上ゟ二人ツレ舞ニナル］　シテへサアハよい年お取おう

此狂言は至テ習多し余ハ口傳あり
嘉永四年辛亥師走吉日写之」9ウ

能狂言番組

嘉永四年の十月に、中之地蔵でとり行われた辻能の番組。十六枚の番組の前後に一枚ずつ興行を見物に行った「馬瀬村　山本作十郎」の覚書が付けてある。十六日間の興行について、能・狂言の演目・出演者が記されている。十六枚のうち、十五枚は刷り物であるが、九日目の番組はやや青みがかった用紙に手書きで記してあり、直前に演目の差換えが行なわれたものと思われる。興行をとり行った一座は出演者の顔ぶれから考えて、当時諸国をまわって辻能を行なっていた仙助座の七代目にあたる一座であろう。この番組には、馬瀬に存在する狂言《琵琶聟》《三十日囃子》の上演記録と、この二曲を馬瀬に伝えたとされる赤木粂三郎の名前が記されている。また、馬瀬の三味線芸に関わると思われる林寿三郎の名も見える。中林武一氏が所蔵。なお、馬瀬にはこれ以外にも天保二年（八月）の仙助座の番組が存在するが、これについては別の機会に紹介したい。

（表紙・手書き）
六十才
嘉永四辛亥歳　金森宗右エ門
堀江仙右エ門

能狂言番組
狂言　赤木粂三郎
十月吉日　狂言　廣岡亀蔵　興行
中之地蔵常芝居おゐて十六日間
（後紙・手書き）
初日十月八ヨリ廿三日迄
馬瀬村
千秋萬歳楽　庄本山もと作十郎

初日　番組
千歳
翁　三番叟
面箱
堀江仙右エ門
高砂　谷口庄エ門
林寿三郎
箙　森卯三郎
金森宗右エ門
善知鳥　福田平右エ門
堀江仙右エ門
白浪ゼンゴ
船弁慶　長谷川来作
附祝言
末廣　山本作十郎
瓜盗人　廣岡亀蔵
米市　山本作十郎
（1オ）

二日目　番組
堀江仙右エ門
加茂　森卯三郎
林寿三郎
八嶌　長谷川来作
金森宗右エ門
角田川　福田平右エ門
堀江仙右エ門
安宅　谷口十作
金森音治郎
現在鵺　長谷川来作
附祝言
雁大名　廣岡亀蔵
蜘盗人　赤木粂三郎
八尾　赤木粂三郎
芥川　廣岡亀蔵
（2オ）

三日目　番組
林寿三郎
清経　谷口十作
堀江仙右エ門
白頭
殺生石　長谷川来作
金森宗右エ門

雲雀山　渡邊源之助
堀江仙右エ門
邯鄲　森卯三郎
林寿三郎
土蜘蛛　長谷川来作
附祝言
文相撲　廣岡亀蔵
宗八　廣岡亀蔵
縄なひ　赤木粂三郎
石神　赤木粂三郎
（3オ）

四日目　番組
林寿三郎
三輪　森卯三郎
堀江仙右エ門
張良　長谷川来作
金森宗右エ門
俊寛　福田平右エ門
堀江仙右エ門
望月　谷口十作
林寿三郎
橋弁慶
附祝言
茶壺　廣岡亀蔵
泣尼　赤木粂三郎
靱猿　赤木粂三郎
成上り　廣岡亀蔵
（4オ）

五日目　番組
林寿三郎
忠度　森卯三郎
堀江仙右エ門
善知鳥　長谷川来作
金森宗右エ門
猩々乱　谷口十作
堀江仙右エ門
烏帽子折　渡邊源之助
金森音治郎
舎利　福田平右エ門
附祝言

入間川　赤木粂三郎
八幡前　廣岡亀蔵
止働方角　赤木粂三郎
釣り女　廣岡亀蔵

（5オ）

六日目　番組

朝長　林寿三郎　谷口十作
富士太鼓　金森宗右エ門　森卯三郎
正尊　堀江仙右エ門　堀江仙右エ門
融（謡曲）　長谷川来作　長谷川来作
羅生門　金森音治郎　長谷川来作
附祝言　渡邊源之助
千鳥　廣岡亀蔵
武悪　赤木粂三郎
弓矢太郎　赤木粂三郎

馬瀬狂言の研究（資料）（山中）

太刀奪　廣岡亀蔵

（6オ）

七日目　番組

龍田　林寿三郎　森卯三郎
景清　金森宗右エ門　福田平右エ門
佐々木（馬乞）　堀江仙右エ門　堀江仙右エ門
道成寺　林寿三郎　長谷川来作
大江山　長谷川来作
附祝言
鍋八つ撥　赤木粂三郎
どん太郎　廣岡亀蔵
釣り狐　赤木粂三郎
松茸　廣岡亀蔵

（7オ）

八日目　番組

林寿三郎

鞍馬天狗　森卯三郎

堀江仙右エ門

鷺乱　長谷川来作

金森宗右エ門

卒塔婆小町　福田平右エ門

堀江仙右エ門

夜討曽我

金森音治郎

雷電　長谷川来作

附祝言

萩大名　廣岡亀蔵

宗論　赤木粂三郎

三人片輪　赤木粂三郎

腰祈　廣岡亀蔵

（8オ）

九日目　番組

林寿三郎

小鍛冶（白眼）　長谷川来作

金森宗右エ門

松風　谷口十作

堀江仙右エ門

春近　渡邊源之助

堀江仙右エ門

石橋　福田平右エ門

金森宗右エ門

金札　森卯三郎

附祝言

佐渡狐　廣岡亀蔵

ふねふな　赤木粂三郎

狸腹鼓　赤木粂三郎

膏薬煉　廣岡亀蔵

（9オ）

十日目　番組

堀江仙右エ門

玉の井　長谷川来作

林寿三郎

大佛供養　谷口十作

金森宗右エ門

葵上　長谷川来作
堀江仙右エ門
鉢木　福田平右エ門
金森音治郎
岩船　森卯三郎
附祝言
鶏聟　廣岡亀蔵
無布施経　赤木粂三郎
素袍落　赤木粂三郎
犬山伏　廣岡亀蔵

（10オ）

十一日目　番組
堀江仙右エ門
春日龍神　福田平右エ門
林寿三郎
春栄　長谷川来作
金森宗右エ門
當麻　谷口十作
堀江仙右エ門
河水　長谷川来作

馬瀬狂言の研究（資料）（山中）

金森音治郎
熊坂　森卯三郎
附祝言
二人大名　廣岡亀蔵
鬮罪人　赤木粂三郎
蜂　赤木粂三郎
空腹　廣岡亀蔵

（11オ）

十二日目　番組
堀江仙右エ門
実もり　福田平右エ門
林寿三郎
小袖曽我
金森宗右エ門
綾鼓　谷口十作
堀江仙右エ門
赤鶴
道成寺　長谷川来作
金森宗右エ門
合浦　森卯三郎
附祝言

餅酒　廣岡亀蔵
朝比奈　赤木粂三郎
六歌仙　赤木粂三郎
不須　廣岡亀蔵

（12オ）

十三日目　番組

堀江仙右エ門
海人　長谷川来作
林寿三郎
悪源太　谷口十作
堀江仙右エ門
山姥（雪月花）　森卯三郎
金森宗右エ門
一角仙人　福田平右エ門
金森音治郎
鉄輪　長谷川来作
附祝言
粟田口　廣岡亀蔵
骨皮　廣岡亀蔵
吃り　赤木粂三郎
清水　赤木粂三郎

（13オ）

十四日目　番組

長谷川来作
弓八幡　谷口十作
堀江仙右エ門
安達原　林寿三郎
金森宗右エ門
藤戸　福田平右エ門
堀江仙右エ門
望月　谷口十作
金森音治郎
関ヶ原与市　長谷川来作
附祝言
鼻取相力　廣岡亀蔵
抜殻　赤木粂三郎
琵琶聟　廣岡亀蔵
柿山伏　赤木粂三郎

（14オ）

十五日　番組

林寿三郎

鱗形　谷口十作

堀江仙右エ門

盛久　長谷川来作

金森宗右エ門

三井寺　谷口十作

堀江仙右エ門

石橋（遠藤子十二段）　福田平右エ門

金森音治郎

禅師曽我　渡邊源之助

附祝言

宝ノ槌　廣岡亀蔵

名取川　赤木粂三郎

木六駄　赤木粂三郎

芯奪　廣岡亀蔵

（15オ）

羽衣

塗附　堀江演作

伯養　堀江仙右エ門

馬瀬狂言の研究（資料）（山中）

咲咤　岡橋忠助

悪太郎　廣岡亀蔵

千切木　赤木粂三郎

蟹山伏　林寿三郎

飛越　富村代次郎

伯母酒　赤木粂三郎

隠狸　赤木粂三郎

三十日囃子　廣岡亀蔵

花折　伊藤粂三郎

墨ぬり　岡橋忠助

福の神　伊藤粂三郎

千秋楽

（16オ）

（やまなか　はな・箕面自由学園高等科非常勤講師）